

2024(令和6)年度 第4号

りんぽかんだより

発行 杵築市隣保館

〒873-0002

杵築市大字南杵築338番地1

TEL/FAX 0978-62-4799



約100年前
にあった

知っておきたい! 豆知識



「福田村事件」を知っていますか?

1923年(大正12年)9月、関東大震災から5日後の千葉県東葛飾郡福田村。朝鮮人に対する悪意ある流言飛語を信じた村人たちによって、香川から来た行商団15人のうち、幼児や妊婦を含む9人が殺害された事件。この事件から100年が経ち、昨年映画化されました。この事件のことを知る人は、もうほとんどいない。でも知って考えてほしい。隣保館にもDVDがありますので気になる方は隣保館にお問い合わせください。

～杵築市人権フェスティバルが開催されました～

12月4日～10日の『人権週間』に合わせ、12月7日(土)杵築市健康福祉センター多目的ホールにおいて、下記の内容で「杵築市人権フェスティバル」が開催されました。

人権作文・人権標語の入賞者をはじめ、市民人権・同和教育講演会の聴講者など多くの市民が参加し、人権尊重の意識を高める機会となりました。

★人権作文・人権標語表彰式

- ・人権作文応募総数 86点のうち最優秀賞11点、優秀賞22点が入賞
 - ・人権標語応募総数101点のうち最優秀賞12点、優秀賞26点が入賞
- ※入賞作品は、ポスターや横断幕、人権作文・人権標語作品集など啓発に活用します。



人権学習壁面展示

★人権作文最優秀賞代表者の朗読

小学校、中学校、高等学校の各部の入賞より代表者が人権作文の朗読をしました。

★幼稚園、小・中学校「人権学習」の取組発表

杵築中学校生徒会が作成した「人権学習DVD」を上映しました。
また、幼稚園、小学校、中学校の人権学習の取組を会場の壁面に展示しました。



表彰式



人権作文朗読



人権学習発表 長野



いじめを考える劇

★市民人権・同和教育講演会

演題「人権・部落問題との豊かな出会いを」

～差別の現実に学び ひと・こころ・ゆめつなぎ～

講師 筑紫野市京町隣保館職員 長野 健一さん

優しい口調で話された内容は「見ようとしなければ見えない差別」について。「無意識の偏見」「小さな攻撃性」「現代的差別」どれも心に残り、自分の考えや行動について考えさせられる講演でした。



～参加者のアンケート(感想抜粋)～

- ・人を傷つける、人を生かすどちらにも「言葉の力」が大きいことがよく分かった。自分の言葉が無意識に心を傷つけ、壊してしまわないように日々責任をもって生活をしたいと思います。
- ・今も続く差別、発する言葉、文字のどちらも差別について学習不足。今からでも知ることが大切と思う内容でした。

令和6年度 杵築市人権作文最優秀賞(高校生の部)

「障害者は特別なのか」

杵築高等学校 一年 藤本 心音



「次のコーナーでは障害を持った方々と一緒にダンスを踊ります。お楽しみに」。違和感があった。これは某テレビ番組のアナウンサーが発した一言だった。毎年恒例のこのテレビ番組を家族で見ているときに発せられたこの言葉。障害を持った方々、ようするに障害者と言われている方々が、健常者である著名人と共にダンスを踊ろう、といった内容であった。

一般的に見ると面白いのであろう。確かにこのテレビ番組の制作に携わった方々は障害者の現実を世に伝えようとしてくれていたはずだ。その思いは十分に伝わってきた。そして出演者がダンスを生き生きとした表情で踊っていたり、好みの著名人が爽やかに愛嬌を振りまいている場面を見ると、面白いと好感を抱くのだと思う。

ただし一般の障害者はどうか。踊っているのが、障害者という類ではなく、抽選で選ばれた方々、立候補した方々などという類なら何も感じなかったのだと思う。しかし障害者が集まって、頑張っただんすをします、というような内容を目の当たりにして、何を感じたのだろうか。

何故、健常者と障害者が違う人間だとでもいうように扱うのだろうか。そもそも、健常者、障害者と区別をすることが私は嫌いなのだ。

断っておくが、私はそのテレビ番組に敬意を持っている。素晴らしい番組だ。だからこそあらゆる視点で考えてほしかった。この企画で傷つく人がいるのではないかと。

私は以前、ある方と交流したことがある。その方は足が生まれつき機能せず、車椅子生活を送っていた。まだ私は知識がなかった上に子供だったため、たくさんの失礼な質問をぶつけてしまったのだと思う。だがその方はにこやかに質問に答えてくださった。そして最後に私はこんな質問をした。「生まれ変わったらどうなりたいですか」。その方は「もう一度私に生まれ変わりたいなあ」とおっしゃった。この時幼いながらに心に響くものがあった。この方は私と同等に、人生を楽しんでいるし、自分であることに後悔はしていない。私と同じ人間なのだ。

つまり私が言いたいのは、障害者を特別ではなく私たちと同じように、日常を生きている一人の人だという当たり前の価値感を持つことが重要だということ。障害者は日常生活で困ることもあるが、それは私たちも同じなのだ。みんな幸せになれるし、みんな困る。だからこそ誰もが思いやりを持ち、健常者だから、障害者だから云々ではなく全ての人に優しさを分かち合っていくべきであると思うのだ。

健常者を特別扱いすること、障害者を特別扱いすることは間違っていると私は思う。みんな違ってみんないい。みんな同じ人間なのだから。

～真の「共生社会」を目指して～

政府は、少子高齢化の進む日本が目指すべき社会として「共生社会」を提唱しています。共生社会とは、障がいのある・なしや性別、年齢などのさまざまな違いにかかわらず、誰もが社会の一員として互いに人格と個性を尊重し支え合う社会のことです。

この共に支え合う「共生社会」を築くために、障がいのある人に関しては、自立と社会参加への妨げになっているバリアを取り除くさまざまなバリアフリーの取組がなされてきました。

しかし、ハード面や制度面でのバリアフリー化は進んだもののいまだに障がいのある人が差別的な言動を受けたり、避けられたり、障がいに対して無関心な人がいることも事実です。そうした行為や意識が、障がいのある人の自立や社会参加への最も大きなバリアとなっているのではないのでしょうか。

顔の形、髪型、性格などみんな違います。共に暮らしていくためには、互いを認め合い、心の中にあるバリアを取り除くことが、真の「共生社会」実現のために必要なのです。